



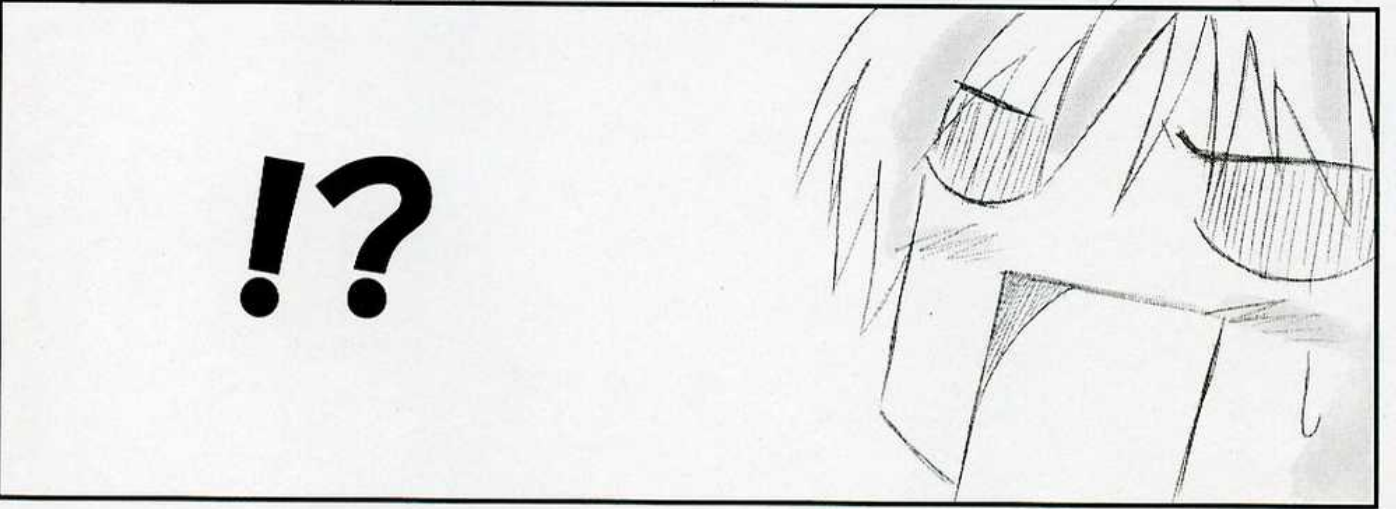
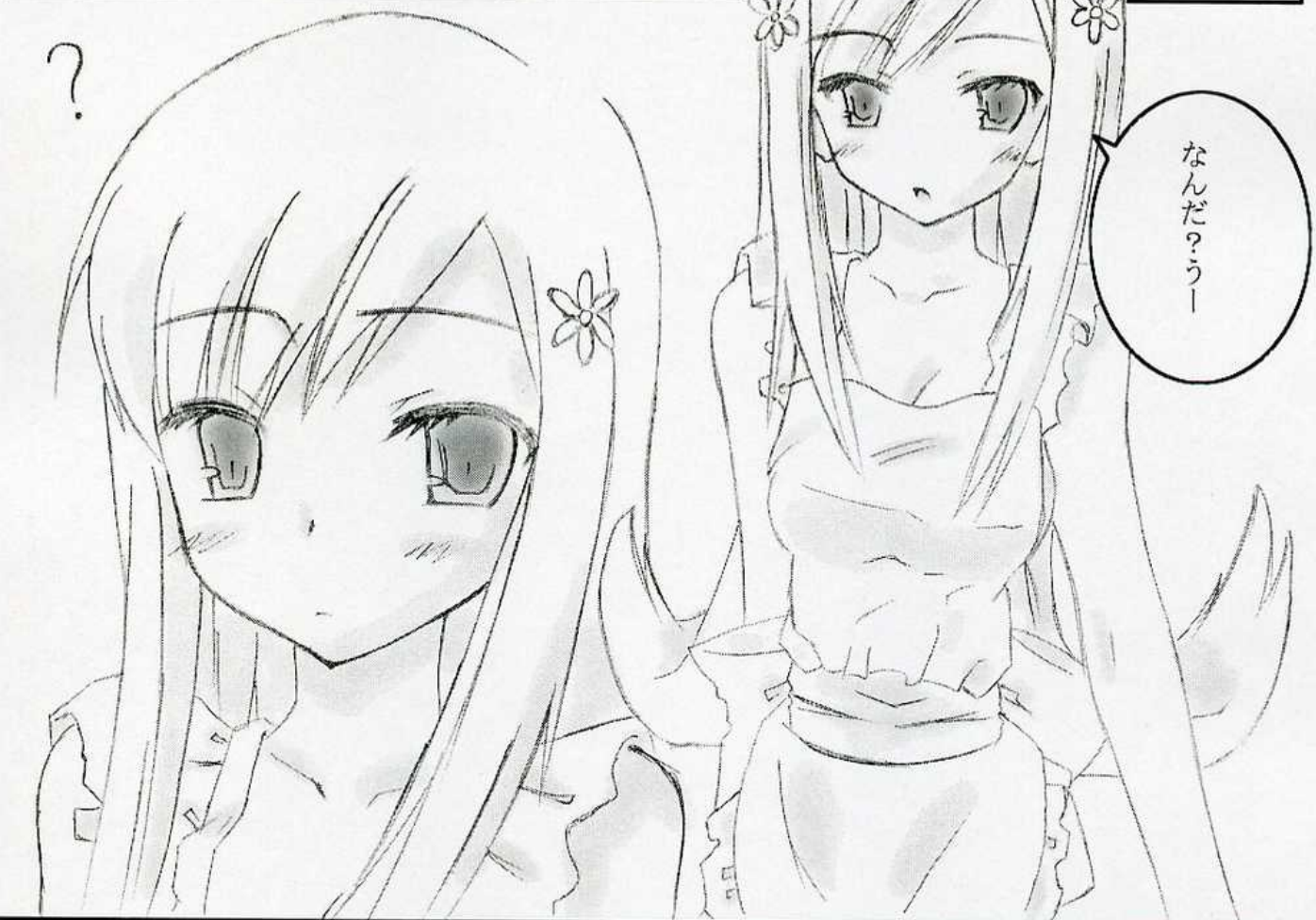
restive girls

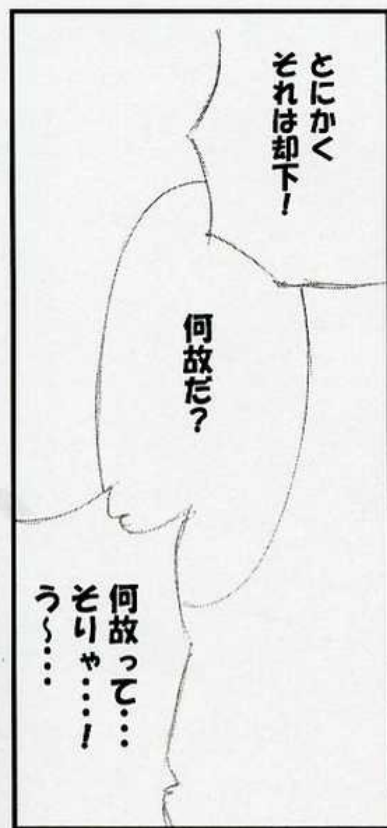
ToHeart2 fanbook

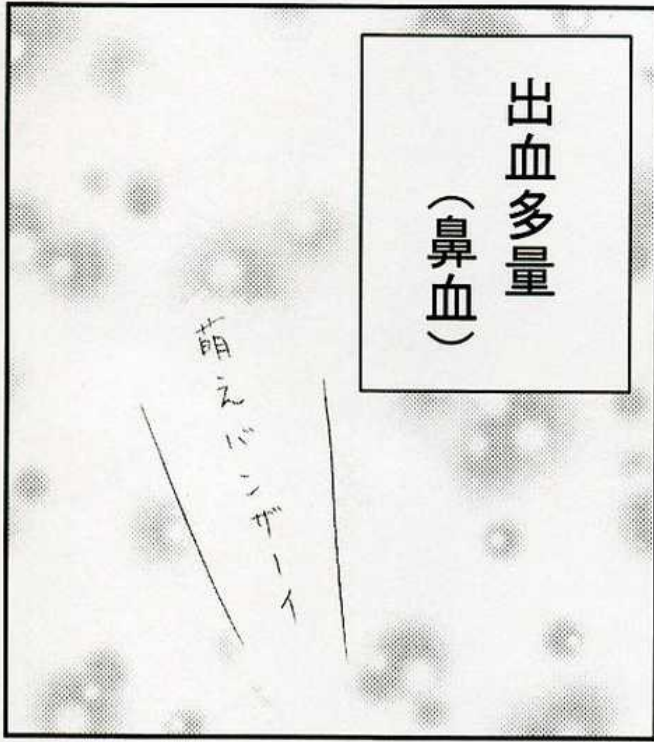
TwilightLyric presents.

2005 autumn

for adult only...







出血多量
(鼻血)

サ
萌
え
バ
ン
ザ
ー
イ



だ……大丈夫か？

っ

ある意味……
死にそう……



る……るーこ……

な……なんだ？



こ……こ……

教えてやる……

その…
本当なのか？

この…
格好をしたら
この星では…

うー…

どっ
どっ
っ
っ

相手に対して
ご奉仕すること♪
仮にも未来の妻だし♡

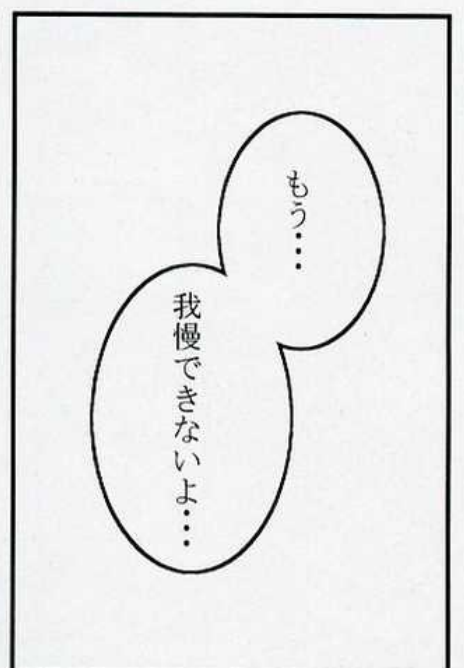
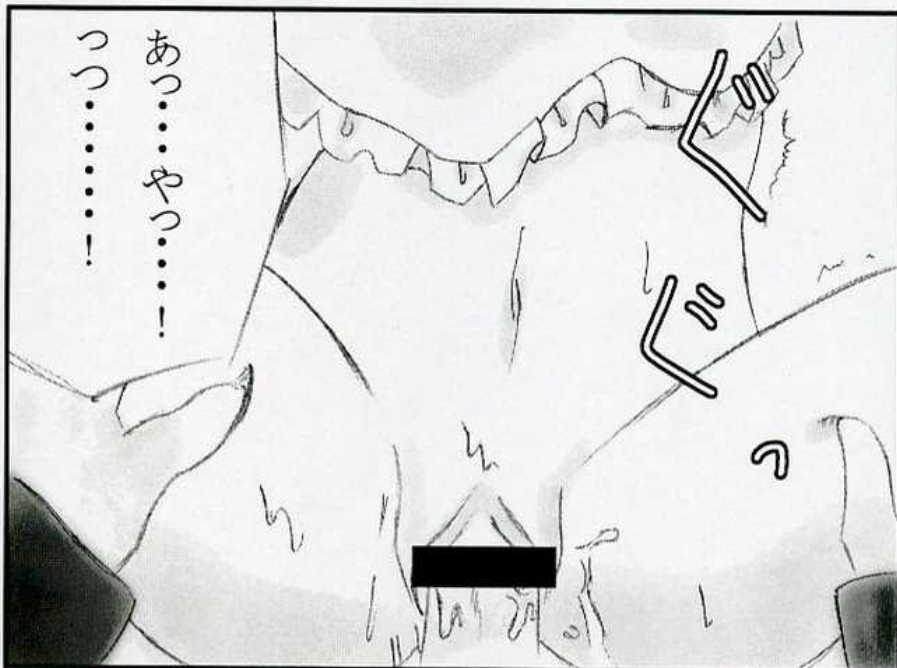
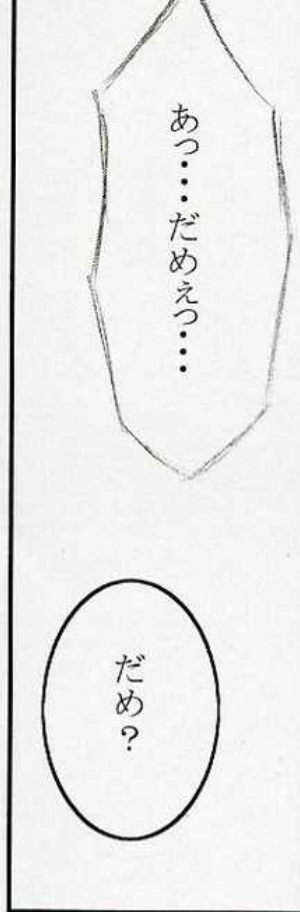
んっ…

はあ…っ

くう…ん…

はあ…は…
やっ…ん…







んう……っ
はあ……んう……!!

んう……っ!!
ひゃうう……っ



んう……っ
あ……っ



あうう……っ!!



んう……
い……っ……よおっ
はん……っ!!

ひあ……っ
あ……っ

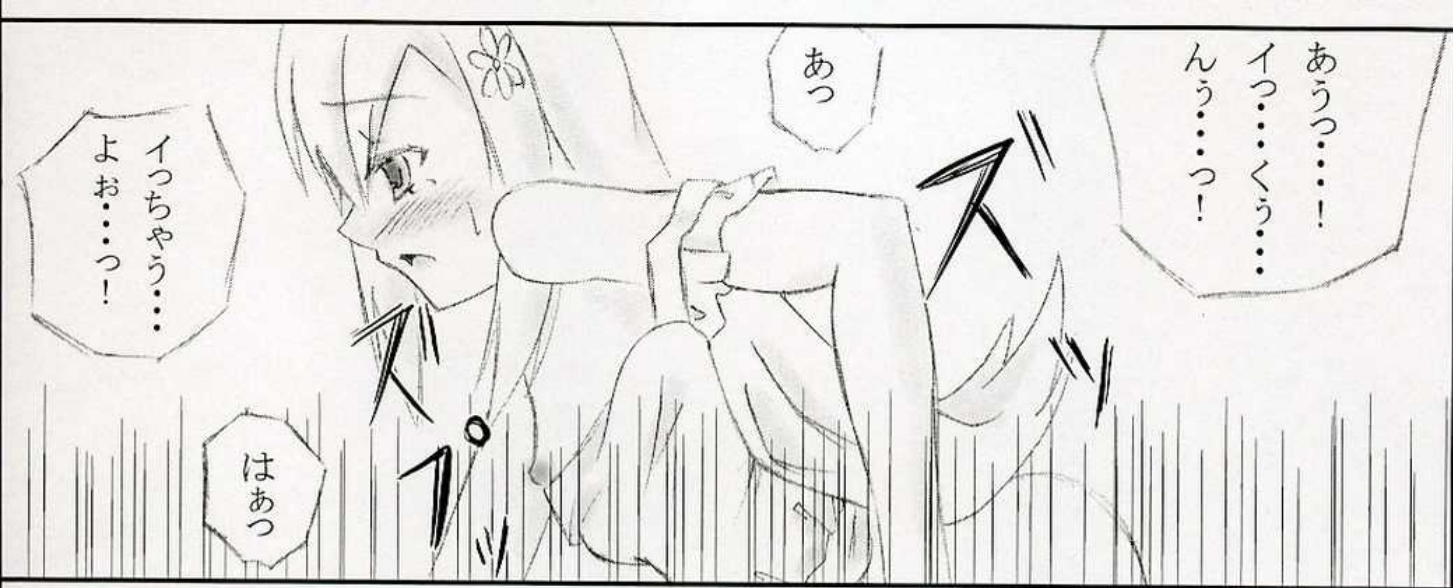
は……っ……あ



はあ……っ

んう

あ



桜は嫌いだ。

別に死体が埋まっていそうとか、舞い散る花びらがうざったいとか、そういう理由じゃない。咲いてるときはいいさ。心がざわついて楽しい気分になるし、素直に綺麗だとも思う。でも散り始めて、次第に緑に変わっていく桜つてのは何とも、切なく感じるのは俺だけだろうか。

舞い散る花びらが涙のように見えるのは、俺だけだろうか。

そう、例えば、それは恋のように刹那的で、儂くて、唐突に終わりが訪れる。

散った後に残るのは行き場を失った心だけ。

その想いもいずれ色あせて、風に流され消えていく。そしてまた春が来て、咲き乱れては散り、また花開く。繰り返し繰り返し、季節が巡るように思いも巡る。では、一番初めの桜は何だったんだろうか。色あせて消えたあの想いは、もうどこにも存在しないのだろうか。

そんなのは、俺は嫌だ。そんな悲しい印象をぶつけてくる桜が、俺は嫌いだ。

だから、願う。

永遠に散ることのない、満開の桜を。

色あせることのない、永久の想いを――。

「タカくーん」

桜並木の帰り道。河原のせせらぎの音色にそんな声が混ざりこんで俺は後ろを振り返った。視線の先には手をブンブン振りながらこっちに走ってくるちっさい女の子。

ちなみに、呼ばれたのは残念なことに俺じゃなくて、俺の横で口を半開きにしながら歩いているこいつ、河野孝明だ。呼び声にも気づかず桜を眺め続ける貴明は呼ばれたことに気づかず呆け顔をし続けていた。

「おいつ、呼んでるぞ？」

「え？誰が……？」

親指を後ろに向けて無言で合図する。

寝起きのように目を細めながら、どこか遠い存在を眺めるように後ろを見た後、困り顔で相手に手を振った。

「しかし、お前よく気づいたな」

「んあ？そりやお前、お前のことをタカくーんなんて呼ぶのはあのチビ助くらいのもんだろ」

嫌味というか、冷やかし気味にそう言った。

反論してくるかに思えたが、予想外にも貴明からはさつきと似たような苦笑が返ってきた。困ったような、戸惑っているような、そんな苦笑。

その笑顔が、別段不思議でもない笑顔が、なんとなく俺は気に食わなかった。

「ちゃんと待っててやれよな。あいつ絶対追っかけてきたんだぜ？」

「……わかつてるよ」

「いやわかってるない。お前の鈍感さが天性のもんだってのは知ってるが、見てみぬ振りつてのは一番いけないね」

「……なら、お前が相手してやればいいだろ」

顔を伏せながら素っ気無く、突き放すように貴明は言った。

一瞬、俺はこいつを殴ってやろうかと本気で思ったが、そんなことできるはずもない。何故なら、

「はあ、はあ、タカくんやつと追いついた。あ、ユウくんも一緒だったんだ、気づかなかったよお」

いつのまにか目の前までやってきてコロコロと笑うこの目の前で、そんなことできるはずもない。

「おい、俺をオマケみたいに言うんじゃねえぞこのチビ助がっ！」
「あゝ痛いよユウ君〜！」

俺が頭を両拳で挟んでグリグリしてやると、泣き笑いみたいな無邪気な笑顔でこのみが俺を見上げてくる。それがこのみが俺へ向ける、精一杯の笑顔だ。

つまりこれが、俺の限界。

「タカクーん、ユウくんがあ〜」

スツと俺の元を離れ、孝明の元へ。それを俺はニシシという意地悪な笑みを浮かべて見送った。トテトテと近づいてきたこのみに孝明はゆつたりと手を伸ばす。でも何故かそのとき、ふと躊躇うように、その手が止まった。だがそれも一瞬のこと。伸ばされた手は、しつかりと優しくこのみの頭を撫でた。

今のはなんだったのだろうか。どうも最近貴明の様子がおかしい気がするの俺の気のせいか？

ふと首を傾げながら考えてみたが、俺の脳細胞の働きなんてたかが知れている。すぐに考えるのを放棄して、気持ちよさそうに頬を緩めるこのみを眺めた。

ひまわりみたいで、太陽みたいで、とても幸せそうな笑顔。

これが、貴明と俺の差だ。

…え？ 悔しいか？

馬鹿言え、そんなふうに見えるレベルの笑顔じゃないだろ、これは。

「えへ〜」

この笑顔を手に入れたとか、奪いたとか、そういう風に思ったことは一度もない。俺にとつてこのみは、本当に妹みたいな奴だし。

それになにより、貴明といるときこのみは本当に幸せそうで…それを眺めている俺も、結構幸せだ。そこに嘘なんてこれっぽっちもない。俺にとつちや孝明もこのみも、なんだかんだ言って大切な幼馴染だ。貴明とこのみと姉貴…ずっと昔から一緒に笑って、泣いて、馬鹿やって。

駆け抜けるように穏やかな日々を過ごしてきたかけがえのない存在。

変わることもなんて望んじやないし、この関係が崩れることなんて、望まない。

不変はよくないことだつて言う奴がいるけど、俺はそうは思わない。この暖かい空気が、

そして絆が、変わらないのならそれでいい。たとえこの、自分でも気づかないほどの仄かな想いが永遠に届くことがないとしても、俺は変わることなんて望まない。

そう…今日この日まで俺は、本当にそう思っていたんだ。

夕暮れ時の校舎。

もう誰もいなくなった教室でなんとなく部活動に励む青春君達のがんばりを眺めていたら、既に日が落ちようとしているのに気がついた。一瞬であった気もするし、何時間もたつてしまっていたような感覚。一体いつ頃からこうしていたのか自分でもわからなかった。

まあとにかく、貴重な放課後の時間を無駄にってしまったのは確かなわけだ。

…いや、無駄でもないか。たまにはこうやって感傷に浸って呆けるのも悪かあない。なんて思ったりするなんて、自分の意外な一面を垣間見た気がした。

「かーつ、爺くさいっ」

そんな自分に苦笑して、俺はスツクと椅子から立ち上がり何にも入っちゃいない鞆を肩にぶらさげて教室をでた。

似合わない似合わない！

こんな風に一日を無益に過ごすなんてこの雄二様にや似合わない。教室を出て、オレンジ色に染まった廊下をぶらぶら歩く。

帰りにゲーセンでもよつていこうか、それとも新作グラフィア写真集でも買いに本屋にでもいこうか。などと今後の予定を模索していると、ふと微かな声を聞いた。

部活動の喧騒や車のエンジン音が遠くに聞こえて、まるで切り離された空間のような校内に、声…。

俺はじわじわと湧き上がる好奇心に押されてその声の方へと足を向けた。誰もいない放課後の教室…何やら情事の予感がするじゃあないか！

悪趣味？ そんなもん、こんなところでイチャついてるのが悪いのさ！

完全に開き直つて、誰が見たつてこいつ変態だと思っほいやららしい笑みを浮かべながら俺はその教室をそーっと覗き込んだ。

「——。」「

そこは、あるもの全てがオレンジ色だった。木造の机も、深緑色の黒板も、リノリウムの床も、全部がオレンジ。そして、そのオレンジ色の中心に、人影が二つ……。それは寄り添うように、抱き合うように夕陽を浴びていた。

息が止まったのが自分でもわかった。目の前の光景が真実なのかと疑った。でもそれはどう見ても現実で、間違いなく教室の二人はそういう関係だった。見間違うはずがない。

そこにいたのは紛れもなく、貴明と姉貴だった。

見てはいけないものを見た。そんな気がして、俺は顔をひっこめて壁に背を預ける。確かに衝撃的な現場を見たというのに、鼓動の早さは変わらなかった。ただ湧き上がるのは、得たいのしれない喪失感と、理不尽な貴明への怒りだった。

俺の中でこのみの笑顔が……浮かんでは消えていく。それは全て貴明へ向けられる最高の笑顔。

失われていく……大切なもの。俺たちの大切な関係が……。

ギリツ、と拳を握り締める。

目の前の空間を睨み付けても、やはりそこには誰もいない。では一体俺は誰を睨んでいるんだ。握り締めた拳は振るわれることなくほどけて垂れ下がった。

その時たぶん、何かが終わったんだと思う。

俺の望んだ……何が。

それで、俺は何を望んでいた？……このみの幸せ？

違う、そんなのは嘘だ。ただ俺は今まで通りの四人の関係がそこにあればそれでよかっただけだ。そうしていられば、このみの笑顔は誰のものでもなくて、失われることもないから。

貴明さえ誰も好きにならなければ、俺はいつまでもぬるま湯に浸かつていられたから……。

一番の愚か者は……俺じゃねえか。

俺が貴明に怒りを覚えるなんて大間違いだ。

貴明は姉貴が好きで、このみは貴明が好き。皆、ちゃんと選んでいたのに、俺は……。

俺だけが、変わらぬ関係を望んでいた。

何だ……俺、馬鹿みてえじゃんか……。

初めっから負けを認めて、自分の気持ち封じ込めて誤魔化して……。最後には……一番大切なものを失っちまったかもしれないのに。

このみがこのことを知ったら、もう絶対にあの笑顔を見ることはできないだろう。だったら初めから、奪っちまえばよかったんだ。

俺が大切に思うなら……自分で守ろうとしないでどうするってんだ。

「馬鹿か……俺は……」

ずるずると壁に背を預けながら小さく呟いた。

その時、タンツという床を靴が叩いたような音を聞いた。

反射的に顔をあげて音のほうを向く。

「——このみ」

いつからいたのか、そこにこのみがいた。

このみは、教室の光景をただ無表情に眺めているようだった。だが一歩後ずさり、何かに弾かれたように突然駆け出した。その後姿を、俺は見ていることしかできない。

……いや、できないのか？

あのまま一人にして本当に、それでいいのか？

ほんとうに、俺は馬鹿だと思う。考えるのは俺の得意分野じゃないし、考える時間なんて無駄だったんだ。

そうさ、深く考えるな、シンプルに行け。

俺にできることなんざ、想いに身を任せることだけなんだから。

階段を全速力で駆け上がる。このみは足がアホかっつてくらい速い。たとえ男俺だつて追いつけるかどうか微妙なところだ。でもそんなこと考えている暇なんて一秒だつてない。俺はただひたすらにこのみの足音を追った。

終点：屋上の踊り場にたどり着いて、俺は膝に手をついた。肺が限界らしく息を吸うだけで痛みが走る。

まさか飛び降りるなんてことはないと思うが、あんまり悠長に休んでいる暇はない。

俺はまだ痛む肺を押さえながらひんやりとしたドアノブを掴み、思い切り開いた。

途端に視界の色が変わる。

オレンジ色だった空は、もう既に紫。

黄昏が過ぎて、一日は本当の終わりを迎えようとしていた。

その灯火のようにまどろむ空は、笑っているようにも泣いているようにも見える。

屋上はもう五月半ばだつていうのに、酷く寒い。誰もいない屋上は閉鎖された地下室よりも寂しく見えた。だから、そんな屋上でこのみを見つけるのは簡単だった。

沈む太陽のフェンス越し、そこにこのみは一人ぼちで立っていた。空から吹く冷たい風に髪を揺らしながらこちらに背を向けて、その表情は見えない。

泣いているのか、はたまた笑っているのか。

俺はゆつくりと冷たい屋上を歩いて、このみへと近寄った。

「このみ……」

俺の声に、このみの肩がビクンと震えた。

そして、ゆつくりと振り返る。

「あれえ？ユウくん、どうしたの？こんなところで会うなんて奇遇だね……」

なんてことない顔をして、このみがいつも俺へ向ける笑顔で俺を迎えた。微かに動揺する。泣いてはいなかった。涙の後もなく、まるでさっきの光景を見ていないと思えるくらいこのみはいつも通りに見える。

「こんな遅くまで残ってるなんて珍しいね？あ、もしかして部活に入ったのかな？」

いつも通り……そう見えたただけだった……。にこにこ笑うこのみの手が、微かに震えているのを俺は見た。

子供みたいに小さな拳を握り締めて、必死で震えに耐えながら無理やりな笑顔を作



つて、このみは平常を装うとしている。
見ているのが、辛い。

俺は：…いつたい、どうすればいいんだろう。ここまで追ってきて、一体どうしよう
つてんだ。

「あはは、ユウ君に限ってそんなことないよねえ」

「…このみ、あのさ」

「あ、ひよつとして誰かと待ち合わせなのかな？ だったら、あたしはもう校舎に戻る
ね」

「このみ…」

「うう寒い！もう五月なのに寒いよねえ。ユウ君も風邪引かないようにねっ」

「このみ…」

終始笑顔で話すこのみの肩を、俺は無理やり掴んだ。言葉の足りない俺にできる

ことなんてそのくらいしか思いつかなかった。今更ながら驚く、このみの身体の細さに。

こんな小さな身体で、このみは必死で耐えていたんだ。

「無理…すんなよ」

「……無理つて、…何が…？」

戸惑ったように顔を上げるこのみの瞳を、俺は真つ直ぐに見つめ返した。

それでもこのみは変わらない。たたいつも通りを演じようと微笑み続けていた。

「無理つて、何が無理なのかな…？ このみは何にも無理なんかしてないでありますよ
……っ」

わけがわからないとでも言うように眉をハの字にする。

「……風邪なんか引いてないし、お腹も…すいてないもん！」

ふてくされたように口を尖らせてこのみは言った。

「…もおくやだなあユウ君。心配してくれるのは嬉しいけど、このみは今日も…
元氣、いつ…ばい…、……」

突然にそれは限界を迎えたらしい。笑顔に一筋、涙が線を描いて落ちた。

それはコップいっぱいに入った水があふれ出るのに似ている。

「あ…れ？ おかしいなあ…何で、…悲しくなんかないのに……」

笑顔のままに涙を小さな手で拭う。それでも涙は溢れてきて、静かに頬を濡らし

ていった。

自分の頬を濡らす涙に苦笑しながら、このみはもう一度涙を拭う。
「えっ…へへ…おかしい…ねえ？」

上げようとした笑顔は上がらずに、崩れるように伏せられてこのみの顔は見えなく
なった。そして俺の上着の小さく握り締めてこのみは囁くように言う。

「ごめんね…ごめんね…少しだけ、後ろ…向いて…」

震えた声。

俺は、どうすることもできずに肩を離して言われるままに後ろを向いた。

トンツ、と背中を押して当られたのはきつとこのみの額だろう。

…泣き声が、苦しかった。初めて、このみが悲しみに泣く声を聞いた。こんなこのみ

を俺は知らなかった。どれだけ貴明のことが好きで、どれだけ一緒にいたかったと望ん

でいたのかも、俺は知らない。わかるのは俺が思っていたよりも想いは強かったということ

だけだ。

背中ですすり泣く声が、ただただ苦しかった。

紫色の空には希望はなくて、そこにあるのは終わりだけ…。

今この時、俺たちの関係が終ろうとしている…俺の好きだった幼馴染が、霧のように

消えていく。もう戻れなかった。もう、変わらずにはいられないことが、痛いくらいに

わかった。背中で囁く泣き声は、押し出すように言葉を漏らした。

「好きに…ならなければよかった。…ずっと兄妹のまままで…、そうすればずっと傍に

いられたのに…もう、戻れないよ…。こんなことになるならいつそ……」

服を掴む力が強くなる。背中に当てられた額が痛いくらいに押し当てられ、屋上を

冷たい風が走った。

「変わらなければ…よかったのに……っ」

変わらなければいい。それは俺が常に祈っていた願い。

でも違う…違うんだこのみ。俺はもう…このまま、嫌なんだ…。

今までのように、穏やかで暖かい日々に戻ることも、貴明に向けられるお前の笑顔を見

続けることも…もう、嫌だ…！

そう、俺たちはもう変わってしまったから…、動き出してしまったから…。



だからもう、戻りたくない！

「このみ」

ゆっくり振り返り、顔を伏せているこのみの頬に触れた。冷たい：すっかり涙に濡れてこのみの頬は驚くほどに冷たかった。

「泣くな」

ただ一言、はつきりとそう言っただけで俺はフェンスに左手をついた。そして、ゆっくりとこのみが顔を上げる。

また風が吹く――

寂しく風に泣く夜の屋上で――

涙に濡れて髪を靡かせながらそこに

知らない女の子が立っていた。

既に言葉は失った。もう何も考えられない。

いや、考える必要がなかった。

涙に濡れる瞳も、寒さに上気する赤い頬も、ただ、そこにいる少女が：本当に綺麗で、俺は――。

自然と風に誘われて、俺はこのみと唇を交わす。

愚かな行動だったと思う。でも俺は間違っているとは思わない。ここに罪悪感はなく、後悔もない。産まれたばかりの美しい星空と唇に感じる温もりが、今ここにあって全てだった。

今までの関係と、そしてこのみの笑顔に

さよならを言おう。

肌寒い五月の夜、誰もいない屋上

生まれたての星空の下で

一つの春が終わりを告げた。

Afterwards『それから』

あの屋上の出来事から、もう一週間が過ぎていた。

あの日を境に、このみは一度も学校へ来ていない。今落ち着いて考えると、あの時の行動は少し軽率だったかもしれない。と、似合わないことを考えることもある。でも考えても何も行動できない俺は、ああすることではか想いを伝えることなんかできやしなかっただろう。だからやっぱり後悔とかはしてないわけで：それがなんとも自分勝手な気がしないでもない。今あいつがどう思っているなんてわからないけど、俺はもう決めちゃった。

だから毎日朝にあいつの家を訪れた。

毎朝玄関前で遅刻ぎりぎりまでこのみのことを待っていた。それこそ、雨の日も風の日もつてやつだ。おばさんにできて中で待つてろつて言われてもひたすら俺は家の前で待ち続けた。

そんなことを、もう一週間も続けている。

我ながら、なかなか根気の続くやつだななんて思ったりして。

「ま、そりや当然なわけだけどな」

小さく笑って、雲ひとつない空を仰ぐ。

今日も俺はこのみの家へと向かっていた。もう街を彩っていた桜は散って、青々とした葉が世界を潤していた。やっぱり少し寂しいけど、俺はこれから巡る季節に心を躍らせていた。これから俺たちがどうなっていくかなんてわかりやしない。それでも、俺は自分が動き出したことが嬉しかった。季節が移り変わることが楽しかった。

同じ季節がないように、同じ想いもありはしない。日々その形を変えて、新しい想いに胸を焦がせる。

今はそれが何よりも嬉しい。

「……おー」

ふと風に誘われて前を見ると、そこにピンクの制服を着たちつこいシルエツト。見たところまだ家の玄関を出て歩き始めたばかり。両脇をリボンで結んだ髪を揺らしながら、このみがトボトボと歩いてた。今どんな顔であいつは歩いてるんだろう。たぶん、ていうか絶対俺が声をかけたら複雑な顔をするんだろうな……。

そんなことを考えていた自分が情けなくて俺は激しく頭をボリボリかいた。
「……ええい女々しい！俺は考えたって仕方ない男だろうがっ」

似合わないに似合わない。元より俺はそんなキャラじゃあない。そう自分に言い聞かせ、俺はこのみに向かって走り出した。近づく背中。このみは今だに俺に気づかない。だから俺は

「そりやつー」

近づいて両脇の髪を結んでいたこのみのリボンを引っかき抜いてやった。その拍子にこのみの髪がほどけ、夏の臭いを感じる風にふわりと舞った。

「わわっ」

短い悲鳴をあげてこのみが頭を押さえた。

そうしている間に俺はこのみの前へ出て

「ようつサボリ魔。ボケつとしてねえでさっさと学校いけぞ」

ニシシと笑って再び走り出す。

すると呆けていたこのみは「あっ」と声をあげて

「か、返してっ……」

と、手を伸ばしながらついてきた。

「か、返してよユウ君！」

トテトテという靴音を背中に感じながら俺は走り続けた。

「お願い……返してえ……」

少し息があがってきたのかこのみの声が小さくなる。

そこで、俺はふと足を止めた。

「あわっつー！」

そのせいでこのみは勢いを殺せずに俺の背中へポストとぶつかった。俺が振り返るとこのみが鼻を押さえて涙目になっていた。

「うう、酷いよお」

涙目で非難しながら上目遣いでこのみが俺を見た。



髪を下ろしたこのみは…心なしか大人っぽく見える。俺はこのみの姿に赤面しそうになる自分を必死で押さえ込んで

「そ、そっちのほうが、似合ってるぞ…おまえ」

そう言つて、誤魔化すように顔を逸らし歩き出した。

「え…」

少し驚いたような声をあげるこのみ。

くそう…かっこ悪いな俺。

もつと自然にやらないと不自然だつた。

自分の甲斐性のなさに気落ちしながらトボトボ歩く。でもやっぱり少し気になって、赤くなっている顔がばれないようにそつと後ろを振り返ってみた。するとそこに、少し困つたように優しく微笑むこのみの姿があった。まだ全てを振り切れてないけれど、それでもその笑顔は穏やかで、暖かかった。だから俺は、俺はその笑顔に微笑み返す。

遠い……。

貴明に向けられていたあの笑顔とは程遠い、小さな笑顔だったけど。

それでいい。それが今俺が手に入れたこのみの笑顔なのだから。

いつか必ず越えてみせる。

同じ想いがないように、同じ笑顔もありはしない。

だから、俺は走り続ける。

いつか、俺へ向けられる最高の笑顔を手に入れるために。

新しい花を、咲かせるために。

る: というわけでおしまいです。読んでいただいてありがとうございました^^

じよ: 二冊目となるとわりりの本。またまた To Heart2 の本でした~w

る: いえ~い! \ (O 'w' O) /

蟻: (w・`) いえーい

る: あ、そうそう! 今回蟻巣君にテキストやっていただきましたのよ~!

蟻: こんにちはは初めまして蟻巣というものでございますΣ(∩;≡;∩)一挙動不審

る: あんまりに良かったから思わずみんなにも読んで欲しくてw

おかげで表紙の由真が置いてけぼりです(・ω・)

じよ: ほんとに... 中身はこのみだものね(・ω・)

る: 由真本と思って買った方、ゴメンナサイ(つω`;))

蟻: 初めての体験で戸惑いっぱなしでした(・ω・*)

る: こうやって皆さんに手に取って読んでいただけるなんて嬉しい限りですものねえ(つー)っ

蟻: 感動です(*∩`*)

じよ: うんうん。これからは蟻巣君がウチの専属テキスト担当ってことになるので、気合入れていきましょい!

る: わほほ~い! \ (O 'w' O) /

蟻: めいっばい精進してがんばります(・ω・)

る: で、じよに君今回の るーこ どうでしたよ~? +(* ' ω . ') + "

蟻: るー \ (∩`)/

る: ナイ乳るーこがさらにべったんこ! Σ(n '∩' n)

蟻: n '∩' n

じよ: べっかんこでべったんこ! (何

る: もう犯罪の域ですね... 蟻巣君...

蟻: 若干置いてけぼりくらってるね僕ら...

じよ: 待てお前ら! お前らもぺたぺたでぶにぶにでロリロリは好きだろう! え!? なんで目をそらすの! ?

蟻: 敬意ですよ敬意(°∇°)

る: クワッ(□`)/ 貧乳は任せたよw

じよ: じゃあここで私が貧乳について語って... っであれ! ? もうページがない! ?

蟻: 原稿用紙200枚じゃ足りないくらいだもんね♪w(謎

る: あ~あ、もっと真理を訊きたかったのになあ~(・ω・) 手を叩くだけで錬成出来るくらいに...ww

る: おし、次回予告ですな...(・ω`・)/

今回は~

じよ: 予定は未定なり! 我らのスローガン!

蟻: 行き当たりばったり \ (一`)/

る: ふはははは! そのとおりだじよに一君 蟻巣君 \ (O 'w' O) /

る: っつ~ことで、そろそろ皆さんとはしばしのお別れですね

じよ: それでは、まだどこかであいましょ~♪べったんこ! (・∩・)/

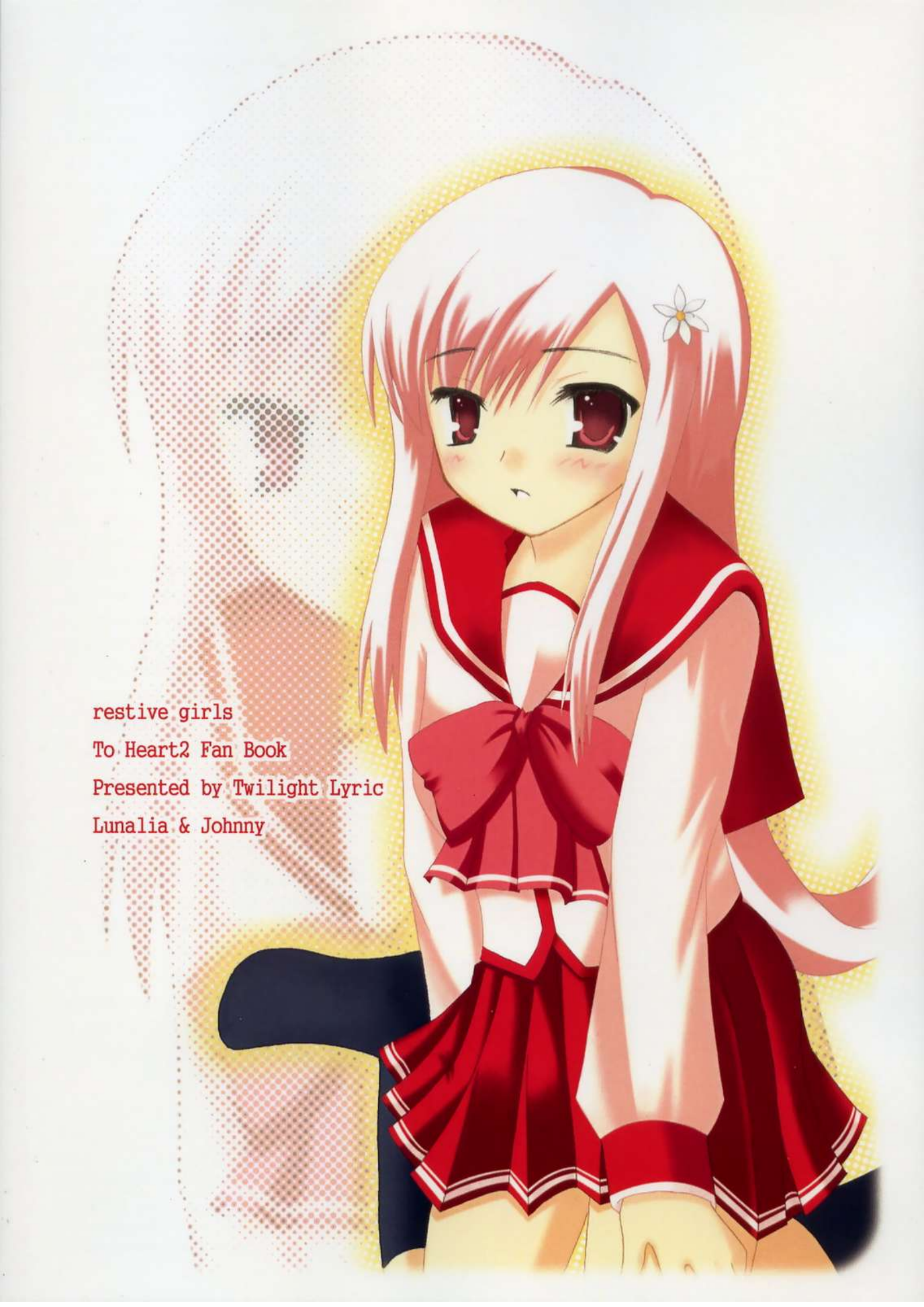
る: べっかんこー!!クワッ(□`)/

じよ: こんな我々を以後よろしく! マジで! w

蟻: 今後ともよろしくです♪(・∩・)/

る: それでは \ (O 'w' O) /

る: るなりあ じよ: じよに一 蟻: 蟻巣



restive girls
To Heart2 Fan Book
Presented by Twilight Lyric
Lunalia & Johnny